

序 文

本書は「発達性協調運動障害 (developmental coordination disorder : DCD)」の身体的特徴を解説するとともに、運動指導方法について、評価方法とともに説明しています。「発達性協調運動障害」は、まだ広く知られた障害名とはいえません。いわゆる「発達障害」の中に分類される障害です。「発達障害」は、2005年に施行された「発達障害者支援法」によって広く知られることとなり、マスコミで取り上げられることも多くなりました。「発達障害」は、一連の隣接した障害をまとめた枠組みで、この中には「自閉症スペクトラム障害 (ASD)」「注意欠陥・多動性障害 (ADHD)」「限局性学習障害 (SLD)」などが含まれます。これらは、社会性、コミュニケーションスキルといった能力における障害として捉えられることが多いことは間違いありません。

一方で、「発達障害」と認識される子どもたちでは、身体運動において「ぎこちなさ」が目立つことが知られています。彼らに観察されるぎこちなさは、集団生活を始める4、5歳頃から明らかになります。たとえば、保育園で体操をする時、手足をどのように動かしてよいかわからず、一人立ちすくんでしまう。まわり子どもたちと同じように指導されているのに、何をしたらよいかわからない、といった状態です。こんなことの繰り返しで、本人も体操することの何が楽しいのか、理解できないかもしれません。さらに小学校に入学し、同級生は休みにボール遊びを楽しそうに行っている。自分も一緒に遊ぼうとするが、どうやってボールを投げたらよいかよくわからない。そんなことの連続で、体を動かすことが嫌いになってしまうこともあるでしょう。また、同級生の輪に入るきっかけも、うまくつかめないこともあるかもしれません。

こうした運動にまつわる孤立感が、発達障害児のコミュニケーション能力の成熟に何らかの影響を及ぼしていることを、否定することはできないでしょう。これは、「発達障害」と運動のぎこちなさをつなぎ合わせる1つの仮説です。

あるいは、「発達障害」には、社会性やコミュニケーションにかかわる器質的な問題が存在する可能性が指摘されています。コミュニケーションの未熟さと、運動発達の未熟さの間に、共通した器質的因子が潜んでいる、というのがもう1つの仮説です。コミュニケーションは、人的環境への適応技術です。運動は物理的環境に対する身体の適応技術です。とするならば、これらに共通する「適応」をキーワードとした器質的因子が存在する可能性もあります。

「発達性協調運動障害」は、特に運動のぎこちなさを主症状とした障害です。臨床的には、すでに述べましたように、「発達障害」においてよく観察されるぎこちなさを独立して扱うものです。診断基準の改定により、「発達性協調運動障害」がASDなどの合併症として並列に扱われるようになり、急激に知られるようになりました。現在、「発達性協調運動障害」は、

ASDなどと比較して詳細な報告が少なく、不明な点も多く残されています。

本書は、現在解明されつつある「発達性協調運動障害」について、障害構造の観点から整理を試みました。この障害が、複数の要因が絡み合い構築されていることを、多くの側面に分け解説しました。ここで示した障害構造を基礎とし、運動指導のための評価方法と、指導プログラムを、具体的に説明しました。

「発達性協調運動障害」は、はっきりと診断されないグレーゾーンが多い障害ともいえます。子どもたちの日常の運動指導に役立つプログラムも多く掲載しています。ぜひ様々な現場で活用していただけることを念願しております。

2018年11月

首都大学東京教授

新田 収